

プラトンの『メノン』

― 現実と哲学 ―

木 立 雅 憲

周知のようにプラトンの『メノン』では、徳は教えられうるものであるか否か、そもそもそれは何であるのかという問題が取り上げられている。主題となっている徳は、単に個人の内面の問題にとどまらず、国家社会の政治とも深く関わる教育の問題であった。そこから当然、ソクラテスの吟味・批判は、対話相手のメノンにだけでなく、ソフィスト的教育の産物たるメノンや保守的政治家アニュトスの言動を通して実際政治家たちや教育者(ソフィスト)たちにも向けられている。そしてそのソクラテスの吟味・批判は、主として対話相手の価値判断(ドクサ)の基準となっている思惑(ドクサ)に向けられていた。というのは後述に明らかにされるであろうように、ソクラテスにとって、徳とは知にほかならなかったからである。われわれは日常それぞれ異なったA・B・C等の雑多な対象を見て、それらを同様に「美しい」とか「正しい」と思い敬しているのであるが、その場合われわれは暗黙のうちに「美」とか「正しさ」といったものが何らかのかたちで存在することを前提しており、且つまたそれらのものが「ある」の同じエイドス(かたち・性格・特性)――(七二C)を保持せるものとしてA・B・C等の雑多な事

物のうちにあることをも認めているということができようであろう。従って論理的には、A・B・C等が美しいか否か、如何にあるかを正しく思い敬すためには、共通に述語づけられる「美」や「正しさ」や「徳」が何であるかが先ず明確に把握されていなければならないはずである。しかるにわれわれは、それらのものが何であるかに関して、時代思潮や社会の通念(ドクサ)を無批判無秩序に受容することによって漠然とした思惑をつくりあげ、それを判断の基準としてそれで足れりとしている。それ故にソクラテスは、それぞれのものが何であるかに関してひとびとが漠然と抱いている思惑をひとつひとつ取り上げて、これを吟味・反駁し、その無知を自覚せしめたいので、真に探究の意欲をよび起すことを直接の仕事としなければならなかったのである。そして対話篇前半のメノンとの問答もまさにそういう性格のものであった。

従って言うまでもなく、ソクラテスの意図は単なる否定のための否定にあるではなかった。アポリアに陥ったメノンが直接徳を定義する努力を放棄して、徳が教えられうるものであるか否かという最初の問題に固執したために、ソクラテスは、その何であるかが分っていない徳を仮設法によって理論的に探究し、「徳は知(識)である」(八八d、八九a)という帰結をひき出す。しかし現実には徳を教える者も学ぶ者もおらず、徳が知(識)であることを示すような証拠が見られないことから、ソクラテスは、「徳が知(識)であるならば教えられうる」という理論的仮設は否定しないが、現実のすぐれた人たちの徳は知識にもとづくものではなく、「正しい思惑」にもとづくものであることを指摘する。即ち「常に正しい思

惑をもっている者は、正しく思い做している限りは、常に成功する
「(九七c)」のであって、「正しい思惑」は、行為を正しく導くとい
う点に関しては、知識に些かも劣るものではない(九七b)。但
し知識と「正しい思惑」とはあくまでも別のものであって、知識の
ほうは原因・根拠を把握していて永続的であるのに対して、「正しい
思惑」のほうは偶然的で、「原因・根拠の推理」(九八a)によ
って魂に縛りつけられていないために他の人に説明し教えることが
できず、不安定で、説得によって、また状況次第で変りやすい。そ
して実は偉大な政治家たちは人並みすぐれた「思惑の確かさ(エウ
ドクシア)」・状況判断の確さによって國家を正しく導いてい
るのである。従って彼らは、上述のようにその能力・徳性が知識に
もとづくものでないが故に、他の人々にも自分たちの徳を授けるこ
とができないのだ、というふうに徳育が現実にはうまくいっていない
ことの原因が説明されている。これに対して徳が、たまたま思惑が
当たっているという状態から厳密に区別される知識(正しい使用の知
・行為を正しく導く知識)であるということは、理論上は否定され
ていない。それだけでなく、對話篇の末尾(一〇〇a)では、その
ような知識にもとづく徳を有し、他の人々にも自らの徳を授ける
ことのできる政治家の出現する可能性が仄めかされているのである
。但し、その知識は普通の意味で学んだり教えたりされうるよう
なものではなく、いわば想起するというしかたでしか獲得されえな
いものであることが読者には暗示されている。

ところで、善に対する希求は最も根源的な希求として万人に備わ
っているであり、「悪を望む者は誰もいない」(七八a)という

ことが、ソクラテスの思考の基本的前提であった。そしてそこから
「もし善い(ためになる)ことが、意識的だと無意識的だとを
問わず、つねに人間の行為の目的となっているなら、善についての
知識(何がよいことであるかを知ること)は、必ず行為の始源にな
るであろう」注(1)という考え方、即ち「徳は(善悪の)知(識)で
ある」という命題に集約される考え方も出て来ているのである。だ
が善とは、プラトンが「学業の最大なるもの」注(2)と呼び、真の哲学
者にして長く厳しい知的実践的訓練を経た末漸くその知を獲得しう
るとしなければならなかったものである。またそれに加えてもう一
つ注意すべきことは、本對話篇では他の著作と異なり、「正しい思
惑」が実践上の見地から知識に劣らぬものとして積極的に評価され
ているけれども、われわれの日常の経験を振り返るまでもなく、(思
惑の当っている限りうまくいくとしても)常に正しいことを思い
做すのは容易なことではないという事実である。豊かな人生経験と
高い見識を備え、人並みすぐれた的確な判断を下すことができ、そ
の「思惑の確かさ」によって國家を正しく導くといわれている実際
政治家たちの思惑といえども、人間の最も根源的な希求の対象を真
に捉えているか否かという点を基準にすれば外れることが多いとい
わなければならぬであろう。実は彼らの「思惑の確かさ」という
のも世間一般の基準(ドクサ)からの評価に過ぎないのであって、
『ゴルギアス』においては、彼らの思惑は真の善を顧みない大衆へ
の迎合であるとして厳しく批判されていたのである。厳密に考える
ならば、思惑の正しさというものは真の知識にもとづいてはじめて
確保されうるはずである。従ってわれわれは「正しい思惑」という

ものを考える場合、思惑の正しさの判定をドクサに委ねることを（ソクラテスやプラトンとともに）あくまでも拒否し、偶然的でその正しさの定かならぬ見かけだけの「正しい思惑」と厳密な善の基準に照してもその正しさが保証されうような「正しい思惑」とを区別し、そして後者のみが知識に劣らず、行為を正しく導くという資格を備えていると考えなければならぬ。そうすると、後者の意味での「正しい思惑」を常にもつことは、（アカデメイアに入學し）自ら哲学的探究の道を進むことによってか、或いは眞の知を有する哲学者の指導する理想国においてはじめて可能となるといわなければならぬ。そしてそのような思惑を常にもつことによって、われわれは確実によく仕合わせることができるということになるであろう。このように考えてよいとするならば、われわれは、眞の知徳を備えた政治家のことが語られていたことと考え併わせて、いわゆる「哲人政治」の思想が『メノン』の段階で明確な形をとりつつあると結論することができようであろう。即ち『メノン』では、現実の国家社会と教育とを救う方向が哲人政治に求められているのであって、眞の知識を有する哲学者にして政治家が国家社会を理想的な状態におき、幼児からの教育全体を支配することによって、哲学者としての資質を欠く他の市民に必然的に行為と結びつくようなよきエートスに裏付けられた「正しい思惑」をもたせ、可能な限りよき生を送らせることができる――無論学習は受動的な外部からの単なる知識の詰め込みではありえないのであって、市民の各人は自主的に想起の過程を前進しうる程度に應じてすぐれた市民となると考えなければならぬ――というふうに考えられていると推測して太過ないと思われる。

そしてこの結論は、『メノン』の直前に書かれたと推測される『ゴルギアス』において既に、あるべき政治の原理がソクラテスの哲学に求められていたことから補強されるであろう。ここでは、ひとひとの想起の努力を促し助け、正義の生活へ向かわせるソクラテスの活動こそ、理想国ならぬ現実の社会においては、唯一の眞の政治活動のあり方であるとされていたのである。注(4) それをうけて『メノン』では、現実の国家社会に対して哲学の果しうる役割が、知識と思惑との区別にもとづいてより明確に考えられているということができるかもしれない。

しかし「哲人王」の思想はプラトンが、『国家』において、世にも常識はずれな説として多大の躊躇の末ソクラテスに語らせねばならなかったものである。われわれは、そもそも哲学という営みが、ソクラテスやプラトンの努力によって「実社会の側からの厳しい批評、カルリクレスが語っているような徹底した哲学無用論をぐぐり抜けて」注(5) はじめて確立されたものであることを忘れてはならないであろう。だが哲学という営みは、現実に対する批判の確固とした基盤を打ち建て、『国家』において語られているような「哲人政治」の思想の正当性を証明しうるようになるためには、猶日らの内部に緊急に解決されなければならないいくつかの根本的な理論的問題を抱えていた。そして『メノン』執筆の段階で、プラトンはそれらの問題と取り組みつつあったのである。われわれは以下、それらの問題の概略を描き、主として「想起説」を手がかりにしてプラトンの思考の軌跡を追ってみた。さて一言でいえばそれらは、眞

に存在するものはあるのか、あるとしたらそれは何かそして如何にして知られるのかという先行哲学者たちによって論議されてきた問題であった。プラトンはそれらの問題に早くから強い関心をもっていた。そして絶対的な価値基準の存在を信じ、定義によってそれらを把握する努力を通じて自他の魂を出来るだけすぐれたものにしようにとした——徳は知に他ならなかった——ソクラテスの生き方の正しさを現実の社会において確認し、ついには直接政治に携わることを断念して師と同じ道を歩むことを選んだプラトンにとっては、何よりもまず、定義の対象とされていた「徳そのもの」や「正しさそのもの」といった道徳的価値が個々の事例を超えて独立の存在をもちうるものか否かということが問題となった。アリストテレスの証言注(6) やプラトン自身の著作から推測されるところでは、彼は感覚的世界は絶えざる生成変化の過程にあるのであって、それに関しては学問的知識は成立しえないとするヘラクレイトス派の思想を早くから受け入れており、従って学問的知識が成立するとすれば、その対象はパルメニデスの教えるように何か感覚的事物を越えたものでなければならぬと考えていた。そして(数学を含む)ピュタゴラス派の思想(『ゴルギアス』以降の著作にその影響が顕著に現われている)との出会いによって、プラトンは上述の問題に関する決定的な暗示を得、後に「エイドス」とか「イデア」と呼ばれる思考によってのみ捉えられる普遍者、不完全な感覚的事物の原型たる完全なものこそ真の存在であると考えるに至ったようである。そして『パイドン』以降の著作において、いわゆる「イデア論」を核心とするプラトン独特の世界観が生長し展開されていく。そしてそれ

と同時に、そのような存在に関する知識の起源あるいは認識の主体たる魂と真実在とのつながりやこの世界と真実在との関係等が、然るべき説明を要する問題としてクロリス・アップされていくのである。おおよそこのような背景においてわれわれの対話篇は書かれたと推測して大きな誤りのないことが、以下において「想起説」を手がかりに「イデア論」生成のさまを垣間見ることによって明らかにされるであろう。

さて『メノン』では、知識の起源の問題が、宗教的ミュートス(物語)(*Muthos*)の装いのもとに、「想起説」によって答えられ、そして数学の領域における探究の実例によって想起の事実を証明する試みがなされている。だが、想起の対象となるべきものは後にイデアと呼ばれるものであることが含意されているものの、想起の対象の性格が明確に規定されていないためにソクラテスの論証も説得力を欠く恨みがあるようである。むしろプラトンがそこで直接狙っているのは、産婆術とも呼ばれるソクラテスの方法の適用の、完結したモデル・ケースを現出することを通して一見破壊的否定に終るかに見えるソクラテスの吟味反駁の仕事のもつ積極的な意味を明らかにすることにより、メノンが現在探究のどの段階にあるかを悟らせ、その先の展望を与えつつ然るべき心構えを持たせようとすることにあったのであって、プラトン自身再度に互って注意しているように、想起説の厳密な証明にあるのではなかった。注(7) とはいえ幾何学の問題による想起の実験を検討してみれば、ガスリーとともに注(8)、少なくとも次のことを指摘しうるであろう。即ち、そこで考察されている真の対象は、数学を誰からも教わったことのない

少年にさえ知られている。彼はそのことを自覚していないが、この世のどこにも存在しない、思考によってのみ捉えられうるような完全なもの、普遍者である。注(9) そして真の知識の対象は、道徳の領域においても他のあらゆる学問の領域においても、何かこの数学的对象のような性格のものであるとプラトンは予想している。

(八五e) そして彼が実験を通じて教えようとしていることは、経験的認識とは異なる、そのような対象に関する知は、よし、思惑の段階であれ、いわば生前の知が想起されるという仕方であれ、内部から得られると考えなければならぬということである。そして更に、そのような知(普遍概念)がわれわれの認識において働かなければ、経験的認識・感官知覚といえども成立しえないということが、『パイドン』や『パイドロス』(二四九b-c)では示唆されているのである。かくて知らない事柄の愛知探究(哲学)が可能なのは、われわれの心が全くの無知・白紙の状態にあるのではなく右のような知(ドクサ)が探究の端緒として内在しているからであるということになる。だがそのままでは探究は発動しない。というのは、本当は知らないのに知っていると思ひ込んでいる(思い違い・独善)というかたちでの無知・われわれ自身の根本的欠如の無自覚こそ人間的無知の実態だからである。しかも政治や道徳の領域においては、そのような価値なきものを善とする思い違い、偽りの正義の確信は直ちに行為に結びつき、われわれを誤り導くのである。それ故にソクラテスは、そのような無知を最大の悪徳と呼び何よりも警戒し、不断に自他の思惑・価値判断の基準を吟味し、正気に

立ち返るよう説かねばならなかったのである。そして何か「善」とか「正しい」といったものがあると予感しながらも、それが何であるかを根拠にまで遡って把握できず徹底的な探究の努力を放棄し、結局そのようなものは所詮人間同士の約束ごとに過ぎないのだという結論に落ち着きドクサに安住している——もしそれで正しいとするならば、哲学という営みには存在の基盤が無いことになる——世の多くの人々に対して、プラトンは、哲学という営みは真の知識の成立とその対象の存在——勿論彼はソクラテスとそれに対する信念をもにしていた——如何に懸っているという自覚のもとに、真に存在するもの、単なる思惑の域を超えた厳密な知識の対象となるものを探し求め、いまやそれを発見し、理論的に展開しつつあったのである。そしてわれわれは(数学的对象にその典型が見られるような)不完全な感覚的事物からは得られない完全な、思考によってのみ捉えられるものに関する知をもっているが、もしそのような対象が客観的に存在するとすれば、われわれの魂のそれらの存在とのつながりは魂の神的起源・不死性を証立立てるものであり、われわれの知の起源も生前に遡られ、学知は想起であるということになるというのが『メノン』を執筆していた時点でのプラトンの思考の大筋であると推測して大きな誤りはないと思われる。

さて想起に他ならぬとされている学知・探究は、(一)無知・思い違いからその自覚へ、(二)そこから正しい思惑の把握へ、そして最後に(三)「原因、根拠の推理」による正しい思惑の知識への転化という過程を迎えるというふうと考えられているが、想起・探究の方法に関しては明確な記述はない。但し数学の分析の方法にもヒントを得たと思われる

る仮設法（二種の手続きが指摘されている）が、新しい（？）方法として導入され、応用されていることは、『バイドン』以降の方法論の発展を考えると注目すべきことである。しかし『メノン』においては、ソクラテスの定義を求める方法の延長上で知識が獲得される可能性は否定されていないように思われる。注⑩ 実はソクラテスの探究においても、仮設の使用に関していえば、既にいろいろな局面で頻繁に用いられているのが指摘されるのであり、また彼の探究そのものが仮設の意識に貫かれていたといえるのである。そもそも探究そのもの・思考そのものが暗黙の裡にその対象（たる未知のもの）の存在を仮定することから始まる事実からしても、またあくまでも厳格に知識を求め慎重に独断を避ける場合、何よりもまず要求されるのは不断の仮設の意識であることから、これは蓋し当然のことであろう。しかしながら、従来のソクラテスの探究における仮設の使用も『メノン』での応用も、仮設（ヒュポテシス）の最も根本的な使用であるとはいえない。というのは、既に見たように、プラトンの精神の最も深いところで次第に明確な形をとってきたいわゆるイデアの存在という仮設こそ、本来の意味での、またわれわれの思考と認識のあり方にとって最も根源的な仮設・前提（ヒュポテシス）であると考えられるからである。そもそもイデアの真実在は、この世界と人生とを統一的に説明するために、論理的・実践的に要請され、前提されたものであり、そしてその真実在の世界は次第に豊かな内容をもってプラトンの精神に開示されて行くのであるが、しかしそれは、究極の、いわば無仮設の根拠を直接把握するまでは、依然として仮設されたものととどまるのであって、厳密に

論証されうるものではなく、ミュートスによって語るはかないような世界なのであった。注⑪

注

- (1) 加来彰俊先生「徳と知（二）——『アクラシア』の問題を中心にして」（弘前大学人文学部紀要「文経論叢」第四号所収）二頁。
- (2) プラトン『国家』五〇五a。
- (3) 加来彰俊先生「ゴルギアス篇におけるプラトンの意図」（西洋古典学研究Ⅷ）及びプラトン著作集『ゴルギアス』「序説」参照。
- (4) プラトン『ゴルギアス』五二二d。
- (5) 加来彰俊先生『ゴルギアス』（岩波文庫）「解説」三〇一頁。尚同書三一八頁参照。
- (6) アリストテレス『形而上学』A巻六章、M巻四—五章参照。
- (7) W.K.C. Guthrie, *Plato: Protagoras and Meno, The Geometrical Experiment with Meno's Slave*, p. 107, (Penguin Classics) 1956, 参照。
- (8) W.K.C. Guthrie, *ibid.*, pp. 109—110 参照。
- (9) W.K.C. Guthrie, *ibid.*, p. 110 及びプラトン『国家』五一〇d—五一一a 参照。
- (10) R.S. Bluck, *Plato's Meno, Introduction*, p. 16 参照。
- (11) W.K.C. Guthrie, *Greek Philosophers*, pp. 98—99, (Methuen) 1967, 参照。